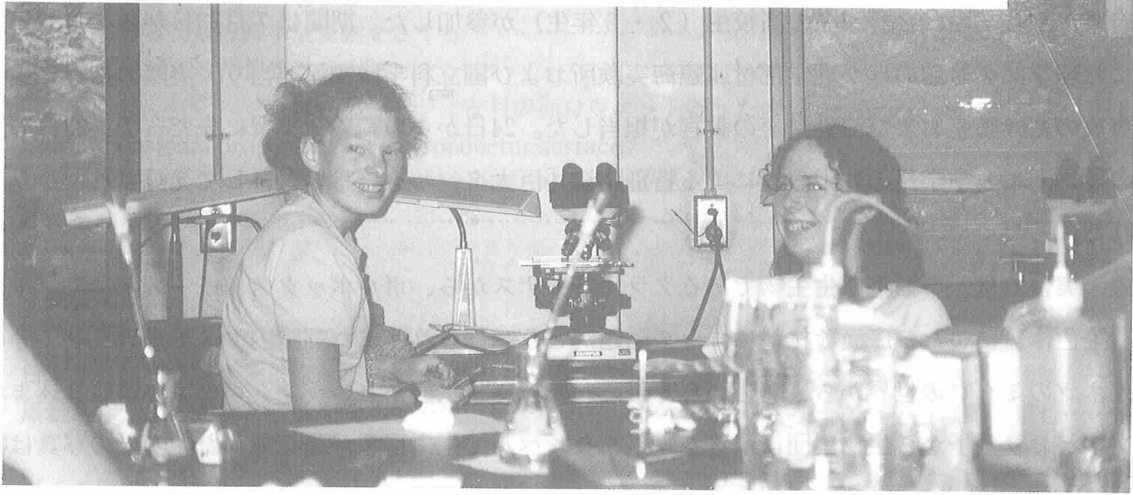
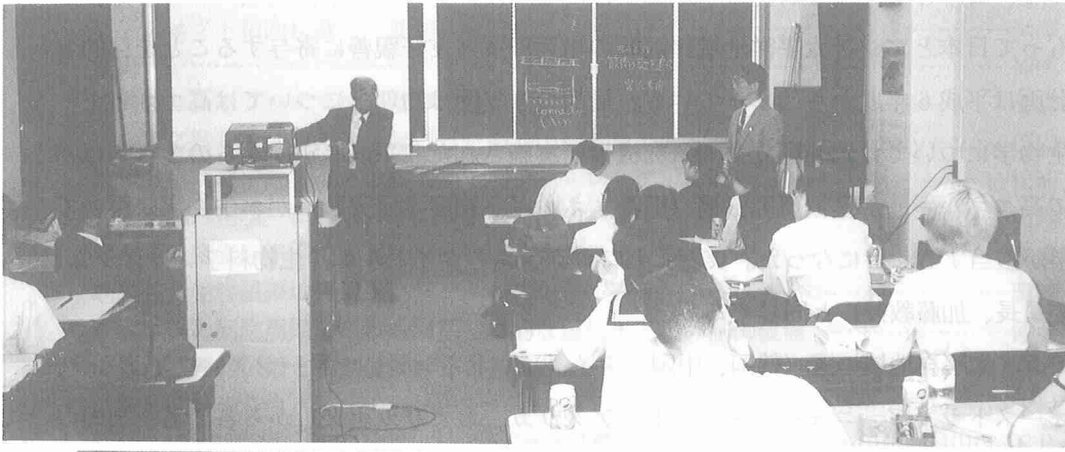


# 東京大学

大学院理学系研究科・理学部

# 廣報



## 表紙の説明

### 高校生インターナショナル・サイエンススクール

このサイエンススクールは、(財)日本国際教育協会主催によるもので、アジア太平洋地域の諸外国から“理科好き”の高校生を国内の大学・研究所に招き、日本の高校生とともに、研究者による講義・実習を通じて物理学あるいは生物学の最新の知識に直接触れさせよう、という英語版のプログラムである。これによって、日本の最先端の研究の一端を学ばせながら、アジア太平洋地域における高校生の交流を促し、もって日本とアジア太平洋地域諸国間の相互理解と友好親善に寄与することを目的としている。この計画は平成6年度から始まっている。最初の3年間は物理学については高エネルギー物理学研究所、生物学については岡崎国立共同研究機構で実施された。平成9年度からの3年間は物理学は引き続いて高エネルギー加速器研究機構(旧高エネルギー物理学研究所)が、生物学については新たに東京大学が担当することになった。実施したプログラムのタイトルは「生物科学プログラム」で、昨年(実行委員長、加藤教授)と同じである。

前回と同様、アジア太平洋地域の国(韓国、中国、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、およびカナダ)から各1名、国内の11都府県から各1名、合計22名の高校生(2・3年生)が参加した。期間は7月23日から7月30日。実施には理学部2号館のほか理学部附属臨海実験所および国立科学博物館が当り、実際の指導は生物科学専攻の基幹講座および流動講座の教官が担当した。24日からの講義・実習に先だって、23日の開校式の後、千葉大学学長の丸山教授による特別講演「巨大タンパク質はいかにして発見されたか」が行われた。

講義・実習では、単細胞原生生物であるクラミドモナスから、ボルボックス、イースト、カエル、ヒト(染色体)にわたる広範な材料について話題がとり挙げられ、また細胞内のミトコンドリア等のオルガネラのミクロの世界から、熱帯から寒帯にわたる森林生態系というマクロの世界が盛り込まれて、文字どおり分子から生物集団に至るさまざまなレベルで生命現象が論じられた。表紙の写真は特別講演、「ボルボックスの分類・進化」の実習、および「細胞運動の分子生物学」の講義・実習の1コマで、高校生達が楽しみながら、熱心に受講している様子が窺える。写真には出ていないが、三崎の臨海実験所では実際に海の生物を手にとって観察したり、国立博物館では陳列してあるいろいろな動物の剥製から毛を採取して顕微鏡観察するなど、バラエティに富むプログラムとなった。このプログラムを通じて、参加各国の高校生が生物とその科学に一層興味を抱き、相互理解を深めてくれたのではないかと期待している。

塩川 光一郎(生物科学専攻)  
xlshioka@biol.s.u-tokyo.ac.jp